

平成30年度入学 推薦入試（一般、専門高校・総合学科）、震災特別推薦入試 試験問題の出典  
社会福祉学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	—	齋藤 孝	悔いのない人生 死に 方から生き方を学ぶ 「死生学	SBクリエイ ティブ, 2015年より	SBクリエイ ティブ

平成30年度 推薦入試（一般，専門高校・総合学科）  
震災特別推薦入試

## 社会福祉学部

### 小 論 文 (90分)

#### 注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、3ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず**黒鉛筆**（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず**解答用紙の指定された箇所に**記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 100点)

芸能などの伝統文化の世界では次の世代に技を引き継ぐためにしばしば秘蔵の書が記されてきました。たとえば世阿弥は子孫に残すものとして『風姿花伝』や『花鏡』を書きました。

『風姿花伝』は世阿弥が書いたものですが、実際に読んでみると亡き父、観阿弥の教を世阿弥がまとめたものだということがわかります。世代を超えて受け継ぐものという点では、家訓に近い性質を持った書と言えるでしょう。

世阿弥が生きた時代は、まだ能は完成されたものではありませんでした。さまざま流派があり、將軍や貴族など身分の高い人たちに気に入られないと食べていけない大変な状況にありました。数あるライバルがいるなか、お客に飽きられないためにはいつもおもしろいもの、珍しいものを見せていかなければなりません。

そうしたなかで、家が<sup>た</sup>廃れずに繁栄していくためにはどうすればいいかを考えて書かれたのが『風姿花伝』という能楽論でした。

ですから『風姿花伝』は芸術書であるとともに、芸の神髄を受け渡し、家を存続させるための書でもあります。そのため世阿弥は家を継ぐ者 1 人にしかこの書を見せず、「口外しては絶対にならぬ」と念を押しています。

そんな門外不出の秘伝書が今は日本の知的共有財産として出版され、多くの人が読めるようになっています。その恩恵を感じつつ、『風姿花伝』のなかから観客に珍しさを感じさせる能の「花」という概念を説く「花傳第七別紙口傳」から有名な 1 節を読んでみましょう。

秘する花を知る事。秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず、となり。この分け目を知る事、肝要の花なり。

(『風姿花伝』花傳第七別紙口傳)

秘めておくことが大切だと知ること。秘めておくからこそ花になる。手の内をさらけ出したら花には見えない。この分かれ目を知ることが花についての重要なポイントなのだと言っています。

では「花」とは何を意味するのでしょうか。別の箇所「花と面白きとめづらしきと、これ三つは同じ心なり」という 1 文がありますから、花とは人を魅了するおもしろいこと、珍しいことを指していることがわかります。

今の私たちが能を見ると「おおっ」と驚くというより、テンポがゆっくりしていて人によっては退屈するかもしれません。しかし当時としてはいろんな工夫を凝らして、珍しいものを見せていたということなのです。

花には「時分<sup>じぶん</sup>の花」があって、少年の頃には少年の頃の、若い頃には若い頃のそれぞれの美しさがあると世阿弥は説きます。そして、年老いて枝葉も少なくなった木に咲く「老木<sup>おいき</sup>の花」こそが究極の花であると言います。

観阿弥が亡くなる直前、駿河の浅間神社で奉納の能を舞いました。その円熟したはなやかな舞は、まるで老いた木に花が咲いたようだったと言います。観客一同は身分の上下なく、褒め称えました。それは青年だった世阿弥の心にも非常に深い印象を残しました。それは36,7歳になって『風姿花伝』を書いたときの世阿弥の筆致からも伝わってきます。

言葉ではなく体で表現し、それを死ぬまで貫く。最後の老木の花を見せた姿自体が、いわば観阿弥の遺訓だったと言えます。そしてその観阿弥の精神を受け継ぎ、世阿弥は能を大成させたのです。

53歳の若さで亡くなった天才能役者、観世寿夫さんの『心より心に伝ふる花』を読むと、観阿弥が伝えたことを一子相伝で世阿弥が伝え、後世の観世さんをはじめいろんな役者さんが確実に守っていることを感じます。

(中 略)

『心より心に伝ふる花』では、身体をぶらさずに息をしているかどうかも悟られないようにせよと書かれていますが、非常に高度な身体の訓練を重ねているからこそ舞台に緊張感が生まれ、夢幻の世界を繰り広げることができるのです。

このような表現をするためには、子どもの頃に思いっきり声を出し、身体を鍛えていくことが大切です。その鍛錬の方法はさかのぼれば、観阿弥が教え、世阿弥が書いたことにたどり着きます。そう考えると、精神のDNAは言葉で伝える方法以外に、もう1つ、身体の型で伝える方法があるということでしょう。型のなかには、習慣や身体の訓練といったものも含まれると思います。

職人の技は、言葉よりもむしろ型で伝承されるものです。老舗にはこういう手順でやりなさい、こういうやり方は変えるなど言われ続け、100年、200年と同じ製法でつくっているところが多くあります。そういうのも1つの型です。

①精神のDNAを残すといったとき、「言葉」と「型」の2つのやり方があります。そして、能の場合はその両方を大切にしてきたのだと思います。

『風姿花伝』の世界を現代の私たちが堪能できるように、あるいは孔子が死んで2500年経っていても今も変わらず『論語』が読み継がれているように、精神というものはぶれません。

心と精神は混同されやすいですが、心は一人ひとりが持っているもので天気のように移り変わりやすいのが特徴です。一方、精神はぶれないために人々のあいだで共有していきやすいものです。

リチャード・ドーキンスは『利己的な遺伝子』のなかで、生物はDNAの乗りもののようなものだと書いたことを書きました。要するにDNAを伝えていくことは生物にとって第1のミッションであるということです。カマキリを見ても、生命をつないで自分は死んでいきます。そう考えると、②精神のDNAを伝えていくこともまた私たち人間のミッションの1つだととらえられます。

自分が生きた証を子どもや家を継ぐ者に伝えておきたいと思うのは自然なことです。

しかし、伝える相手は単に家の者だけでなくともかまいません。文化にもDNA的なものがあり、「ミーム」と名づけられています。また会社にもDNAがあります。どんなDNAを誰に伝えていくかは、一人ひとり違っていいと思います。

また、伝え方も言葉なのか習慣なのか、あるいは型なのか、残すものによって異なってくるでしょ

う。

伝える時期についても、何も死ぬ間際に限定する必要はないと思います。常日頃から、口癖のように伝えていけばいいでしょう。

そのとき、家訓のように短い文言で標語にしておくとういと思います。「児孫のために美田を買わず」というフレーズを覚えている人がなぜ多いかといえば、非常にシンプルで伝わりやすい標語になっているからです。

(齋藤孝『悔いのない人生 死に方から生き方を学ぶ「死生学」』, pp. 178-186, SBクリエイティブ, 2015年より, 一部改変)

問1 下線部①『精神のDNAを残すといったとき、「言葉」と「型」の2つのやり方があります。』とあるが、その2つのやり方の違いについて、本文の内容に即して、100字以上120字以内で説明しなさい。

問2 下線部②『精神のDNAを伝えていくこともまた私たち人間のミッションの1つだととらえられます。』とあるが、それはなぜだと思うか、あなたの考えを700字以上800字以内にまとめなさい。